

耶麻

令和5年度 第2号
[通巻 135号]
耶麻地区小学校長会
令和5年10月18日



巻頭言

「チャットGPT」

耶麻地区小学校長会副会長 喜多方市立塩川小学校長 樋口 喜敬

原稿依頼があると何を書こうかと本当に迷うものです。特に今回、タイムリーなネタはあるのかと自問自答していましたがなかなか見つかりませんでした。「チャットGPT」で何かヒントはないかなと思い、「現在 教育 課題」で検索してみました。すると、

- 1 公教育のアウトソーシングで教師負担の軽減へ。公立中学校の部活動を地域のスポーツクラブや文化芸術団体などに移す「部活動の地域移行」が2023年度から段階的にスタート。このような学校現場の負担を地域や民間企業の力を借りて減らしていく動きに注目が集まり学校教育ビジネスも広がりを見せています。
- 2 期待がかかる“次世代の学び”。学びの場も、学ぶ内容も、従来の枠に捉われない“次世代の学び”のあり方に注目が集まっています。インターネット上の仮想空間「メタバース」を利用した教育もその一つ。宇宙旅行やタイムトリップなど現実では不可能な体験ができることも大きな魅力ですが、さまざまな理由により学校に通うことができない子どもの新しい学びの場・居場所としての活用も広がりつつあります。
- 3 GIGAスクール構想、集大成へ。「GIGAスクール構想」により一人一台端末や高速通信ネットワークなどのICT整備が進み、タブレットやパソコンを活用した授業が定着しつつあります。デジタル教科書はすでに利用を始めている学校もありますが、2024年の教科書改訂に合わせて導入が本格化する見込みです。

とすぐに回答を出してくれました。これは素早い、この回答をコピーして使えるなど思いました。あっという間に、原稿の半分が埋まりました。恐るべし「チャットGPT」

AIの進歩により様々な分野で活用され、全てのことが便利で短時間化されています。学校の現場にもますますAIが利用され、デジタル化されて授業の中にも入り込み、学びの個別化がさらに進むのではないのでしょうか。それは便利で良いこともあると思いますが、決してアナログの良さを忘れてはいけないと思います。今、昭和の時代が見直され、一種のブームになっています。これは、デジタル化の反動ではないのでしょうか。アナログが無駄があったり、うまく進まなかったりしても、その結果作り出された物の良さに味わいがあるのでしょうか。

学校も同じで、デジタル化されながらもアナログの手作り感や人同士がぶつかり合い意見を言い合う場が大切なような気がします。ますます子ども同士で意見を言い合い、学び合うことが重要になってくると思います。学校にはアナログで人間くさい場も必要です。

私たち校長は、最新の便利さと古くても昔から変わらないもの、変えてはいけないものをよく見極めることが大切なことだと思います。そして、学校の中にそれぞれの良さを生かして落とし込んでいくこと、その使命をいただいているのではないのでしょうか。何でもかんでも新しいものがないのではないと思います。

でも、今回「チャットGPT」のおかげで原稿の半分が埋まりました。やっぱり助かるなあ。

～退職校長より～

実り多い生活をめざして

前喜多方市立熱塩小学校長 飯野 淳

今年3月末をもちまして定年退職し、36年間の教職生活を無事終えることができました。その内、校長職に就いていた期間は、多くの校長先生方から、コロナ禍での学校経営や生徒指導をはじめ、本当に多くのことについて温かいご助言をいただき、皆様方の教育に対する情熱、愛情、思いを日々胸にきざませていただきました。厚く感謝申し上げます。

校長在職中を振り返りますと、私は、まず、「辛抱」の日々だったと思います。「我慢」は嫌なことをただただ、耐えることですが、「辛抱」は好きなことのために耐え忍ぶことであり、希望や思いやりといった気持ちが含まれます。新型コロナウイルス感染症で、色々な制限や制約がありました。その様な状況下での教育活動において、子供たちの笑顔が多く見られたことが「辛抱」につながったと確信しています。

また、コロナ禍での制限をうけながらも取り組んだ熱塩小学校農業科も忘れることはできません。熱塩小学校の農業科の特徴は、大きく2つあると思っています。

1つ目は、「なすことによって学ぶ」という農業の実体験を重視した教育であることです。有機農業の取り組みですので、とにかく作業内容が大変多いです。でも、手間や時間はかかっても手作業を大切に、みんなで力を合わせることや自分の手を使って工夫することを教えました。さらに手作業をしていると、子供たちは様々な生き物たちの存在に気づきます。そして、その出会いを楽しみながら、田んぼや畑は、作物だけでなく、たくさんの命を育てていることを学んでいきました。

2つ目は、「食べる、食べてもらう喜び」というように、自分たちで育て、収穫した作物を食べること、そして地域の方々にも食べてもらうことを大切にしました。食べてもらう活動の一環として「笑顔の赤飯届け」という活動を行いました。これは、収穫したもち米と小豆を使って赤飯を作り地域の一人暮らしのお年寄り

に届けるものです。この食べてもらうという経験は、子供たちが、たくさんの人と喜びを共有する機会となりました。農業科を通して、困ったことがあれば助け合い、失敗してもあきらめず前に進む、温かくしなやかな心が育っていると思えました。このように、保護者、地域の方々、先生方に支えられ、子供たちの成長と笑顔を見ることができたとても幸せな日々でした。

退職してからの私ですが、4月3日に非常勤講師として、裏磐梯小学校に着任しました。これまでは、当たり前のように勤務する学校に通っていましたが、改めて自分の居場所があるということは有り難いことだと思えました。

裏磐梯小学校では、午前中4時間の勤務で、複式解消として、二年生の国語科と算数科、三年生の理科、五年生の社会科の授業を担当させていただいています。貴重な機会をいただき感謝しています。朝、教室で子供たちを迎え、共に走り、歌い、学び合う生活に、やりがいを感じています。

午後の楽しみも増えました。まず、裏磐梯の山々の登山、湖沼群周辺の散策など自然に親んでいます。6月の中旬に磐梯山に登りました。その時、「バンダイクワガタ」という磐梯山にしか咲かない花を見ることができ、とても感動しました。自然の不思議、すばらしさを今後も感じ、見つけていきたいと思えました。また、野菜づくりも始めました。今年は、高温障害のため、実がつかない野菜もありましたが、育った野菜を頂きながら収穫の喜びを味わいました。収穫した野菜をご近所の方々にも食べて頂き、喜んで下さるのもとても嬉しいことです。

これまで関わってきた子供たちや教職員が、この様々な経験を糧に、さらに高みを目指して歩いていくことを願うとともに、自分自身もこれからの人生、実り多い有意義な生活を送っていききたいと思っています。

転出校長より

喜多方はいいところ

前喜多方市立加納小学校長

現会津美里町立宮川小学校長 伊達 明美

「喜多方市立加納小学校!？」

新任の校長としての勤務先を知ったとき、初めての耶麻地区・初めての喜多方での勤務となることに不安と期待があったのを覚えています。不安が先にあったのも事実です。そのような私に、先輩の校長先生がくださった本は「瓜生岩子」に関するものでした。教育書ではなく、熱塩加納・喜多方の偉人、瓜生岩子についての書物に込めてくださった想いは、地域を知ること、そして地域を愛することであったのだろうと振り返ります。2年間の勤務を終えた私に、地域の方がかけてくださった「校長先生は、現在の瓜生岩子。少しオーバーかなあ。」という言葉は、忘れることのない幸せを与えてくださいました。2年間、地域の方々に学校を励ましていただきました。灯台下暗しで、教職員や保護者の方は気づかない、教育活動の大切さや地域の人・ものの貴重さを積極的に教えてくださいました。自信をもって学校教育を進めてください、と力をいただきました。子どものために、という慈愛の風土は、まさに瓜生岩子の時代から受け継がれているのでしょう。子どもを真ん中に考える、「喜多方はいいところ」と今なお思っています。

現在、校長として2校目の勤務となりますが、やはり、地域との連携を大切にしながら学校経営を進めていきたいと考えています。地域に愛される学校であるために、地域に愛される校長でありたいとも、めざすところです。校長としての初めての勤務校で学ばせていただいた一つ一つの経験が、今につながっていると思っています。「会津美里はいいところ」と思えるように、励みます。子ども達に地域への誇りや愛情を育てられたときに、その思いに達することができると、先に経験しました。また、がんばってまいります。

耶麻地区校長先生方には、ご指導を賜りありがとうございました。

転出校長より

耶麻地区の思い出

前喜多方市立姥堂小学校長

現会津若松市立松長小学校長 齋藤 学

令和2年度に新任校長として初めて赴任したのが姥堂小学校でした。4月着任の少し前から新型コロナウイルスが流行し始め、その1学期中には約1か月の臨時休校となりました。そのため休校明けの土曜授業、7月いっぱいの授業日となり、また、運動会をはじめ様々な行事も延期、中止など難しい判断を迫られました。姥堂小学校に勤務していた3年間はコロナ対応に苦慮した3年間となりました。

耶麻地区勤務で印象に残るのは、令和3年度に小教研道徳科の県大会を道徳部の部長として開催したことです。授業提供校は関柴小学校で、関柴小の渡部憲生校長先生、小教研事務局の先生方、会員の先生方のお力をお借りしながらなんとか実施することができました。講演会ではファシリテイドック・ハンドラーの森田優子先生にオンラインでお話をさせていただき、大変勉強になりました。

耶麻校長会では令和4年度に庶務を仰せつかり、耶麻校長会開催の準備や地教委への予算要望の段取りをしたり、次年度の行事計画を立てたりととてもいい経験をさせていただきました。

耶麻地区での校長としての3年間はとても有意義で、様々な経験をさせていただきました。それを現在の職場で生かそうと頑張っているところです。



転出校長より

感謝

前北塩原村立さくら小学校長

現福島県企画調整部文化スポーツ局生涯学習課主任社会教育主事

武藤 隆浩

校長先生方におかれましては、新学期を迎えてもなお、繰り返すコロナの流行の波に直面し、学校経営に大変苦慮されていることと拝察いたします。振り返ると、2年前の4月、新任校長として耶麻地区に赴任した当時、ウイルスの実態が未解明で活動自粛の風潮が顕著に見られる一方、文科省の方針により、各種教育活動の再開に向け動き始めた時期でもあったため、授業参観や運動会、体験・宿泊活動等、自粛ありきではなく、常に学びを保障した実効性ある判断を迫られました。

学校経営者として未熟で判断の拠り所もなく苦渋の日々を送る中、そのような私を多面的に支え、温かく励ましてくださったのが耶麻地区校長会の皆様でした。校長先生方には、学校経営のみならず、外部組織である小教研、校長会等の活動再会においても活動の進め方や活動内容に至るまで、相談をすると懇切丁寧にご教授いただきました。皆様方のご厚情に、紙面をお借りして深く感謝申し上げます。

さて、現在は、福島県企画調整部文化スポーツ局生涯学習課に勤務させていただいております。本県では、近年、少子高齢化に加え、東日本大震災やコロナ禍等の影響も重なり、生涯学習への参加率が減少傾向にあります。また、地域コミュニティ機能が弱まり、様々な地域課題も顕在化しています。このような中、より一層、県民の生涯学習への参加を促し、学びによる人づくり・地域づくりを実現するため、県内の生涯学習の情報を一元化し、県民に広く発信する「生涯学習情報サイト」の構築を進めております。公民館や高等教育機関等の事業をとおして、家庭教育や青少年教育といった側面から長年学校教育が抱えているいじめ・不登校、教職員の多忙化といった課題解決の一助にもなればと考えております。

結びに、耶麻地区小学校長会の益々のご発展と皆様のご健康とご多幸を心よりお祈りしております。2年間、本当にお世話になりました。

学校経営あれこれ

トキウモウダニにならないように

喜多方市立関柴小学校長 酒井 康雄

日本産のトキは絶滅しましたが、現在、佐渡島だけでなく、本州でも繁殖活動が行われています。保護施設内のトキには、一日三食、お昼には生きたドジョウが与えられます。ドジョウは好物の一つです。ところが、池に放たれたドジョウを上手に獲ることができないトキもいます。



野生復帰に向けたプログラムが進み、飼育下で生きる術を身につける訓練も行われています。その傍ら、日本産トキが絶滅した際、トキの羽毛のカビや古い皮脂を食べて共生していたトキウモウダニも密かに絶滅したことは余り知られていません。生態系の一部を担いながらも、名もない多くの種が絶滅している事実があります。

現在の学習指導要領作成の際、教員の大量退職に伴い、これまでの質の高い授業技術や実践を伝承しなくてはいけないという思いが込められていると聞きました。主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善もその一つです。

しかし、若い教師よりもベテランの教師の方が、思うように自分の授業スタイルを改革できず、悩んでいる方が多いです。併せて、大量退職の中、教職員の資質向上につながる学校文化を余計なお世話と考え、若い先生に伝え切れず退職された先生も見受けられます。

教員の世界がブラックと言われる中、以前を古き良き時代とするわけではありませんが、自分の教員としての醍醐味や楽しかった思い出をお節介でも伝えることが必要ではないでしょうか。魅力的な学校づくり、ひいては教員、管理職の魅力づくりにつながると思います。ひっそり退職することなく、思いを伝える努力をしたいものです。

学校経営あれこれ

市町村・地区だより

どの子ども楽しいと思える学校に向けて

「なすことによって学ぶ」農業科

喜多方市立駒形小学校長 齋藤 敦

喜多方市立上三宮小学校長 小野 明彦

本校の校章は、駒形小学校の「駒小」の文字を稲穂でつつむようにデザインされている。これは、緑豊かな森林と会津平野の広大な田んぼから天の恵みを与えてもらえる環境の中で、自然の恵みを受けながら、たわわに実っていく稲穂のように、共に手をとり合って伸び伸びと成長していったほしいという願いが込められている。稲穂の形をじっくり見ていくと、両手で「駒小」を包み込むようにも見える。我々教職員が、大切な子どもたちを守り、支え、伸び伸びと成長し、稲穂のようにたくさんの恵みを与えられるようなたくましい人間に育てて行く使命を強く感じる。

校章の願いの実現に向け、学校経営の理念として「どの子ども学校に来て楽しかった。また明日も学校に行きたい。」と思える学校づくりを掲げている。教職員に示すだけでなく、保護者そして子どもたちには、校長としての「約束事」としている。そのため「心身ともに健康で意欲に満ちた教職員」を柱の一つとして設定している。

子どもたちの学校生活の充実に向け日々指導し、支えているのはやはり一人ひとりの先生方である。その先生方がやりがいを持って教育活動に取り組めるよう必要な指針を示すのが校長の役割ではないだろうか。一昨年度より月2回の事務整理日の設定、各種帳簿や学校行事の見直し、会議の精選など子どもと向き合う時間の確保に向けて取り組んで来ている。今後も、認め合い支え合う教職集団づくりなど、教職員一人ひとりが教員としてのやりがいを感じ、充実した教員生活を過ごせる学校づくりに向け取り組んでいきたい。



喜多方市というと、まず思い浮かべるのがラーメン。そのほかにも蔵、地場産業である漆器、桐加工、酒、味噌、しょう油…等、たくさん名物がある。

平成18年度から小学校で行われている農業科も喜多方市の特色の一つであろう。「なすことによって学ぶ」という精神に基づき、子ども達の豊かな心の育成、社交性の育成、主体性の育成を図ることをねらいに実施されている。

今年度も農業科の実践が始まった。種籾蒔き、田植えと今ではすっかり機械化された作業を手作業でも行っている。児童が昔の人々の苦労や願いに思いをはせ、稲への愛着、感謝の気持ちが育つようにと願ってのことである。田植えや除草は、直接田に入り、泥だらけになって行すが、嫌がる子どもは一人もおらず、歓声を上げながら楽しそうに作業をしている。現在、本校の周りは田や畑が多いが、家が農家である児童は少ない。農業はもちろん植物や動物を育てる体験や土に触れる経験が不足している子どもたちが多いと感じる。だからこそ、自分たちで苦労して植え、世話をした苗が成長し、実を付け収穫できたときの喜びは格別であり、子どもたちの成長には欠かせないもの、貴重な体験活動の場である。

このような体験をした子どもたちは、生命を慈しみ、思いやる心を態度に表せる子に成長していくと思う。当然いじめなどの行為がなくなることにもつながると考えられる。今年も学校の圃場には黄金色の稲が順調に成長を続けている。

10月初旬にはいよいよ収穫を迎える。収穫祭で自ら育てた作物を口いっぱいほおぼる姿と輝く笑顔が、今からとても楽しみである。子どもたちと共に収穫の喜びを味わうために、微力ながら尽力していきたいと思う。

話の小窓

くじけない強い心

喜多方市立堂島小学校長 橋本 淳

公立小・中学校等で深刻な人手不足がさげばれています。この影響を受けている学校もたくさんあり、本校も校内体制づくりに大変な苦労が続いています。

処遇改善、働き方改革、教員定数増、スタッフ増など、多岐にわたる人材確保のための措置はありますが、一つや二つの対策で解決するような単純なものではないでしょう。ため息ばかり・・・。

このようなマンパワー不足の厳しい中、2つの嬉しいニュースが飛び込んできました。

1つ目は、本校の2年生が先生になりたいという夢を持っていることです。担任に憧れ、「〇〇先生みたいになりたい。」と昼の放送や校長室でのお話タイム等で、昨年からずっと言い続けています。

2つ目は、私が最後に担任したクラスの子が、今年度市内の小・中学校で教育実習を行い、福島県の教員採用試験を受けたということです。3月末に実習の連絡があり、今年に入って採用試験を受け、1次を通過したと聞いたとき、久しぶりに目の前が明るくなった気がしました。

教員のなり手不足に関するニュースが目立って報道されていますが、身近を見れば種は蒔かれており、中には芽を出そうとしている人材もいると気づいたとき、「一筋の光明が差しているではないか。教員の魅力も伝わっている。」と勝手に教育界の未来に希望を抱きはじめています。(少し楽観的でしょうか・・・)

一方で、人と関わる上で最低限の力は身につけ、社会に出てほしいという願いもあります。喜多方市の「なかよくたくましく生きる」の最後に「くじけない強い心」という文言があります。この心が根底にあれば多様化した社会を乗り越えられるはず。その心を育む手立てを講じ、身近なところからコツコツと積み上げたいと思います。子どもの夢が実現し、長く続くようにと願いを込めて。

話の小窓

ふるさとのよさを感じて

喜多方市立熱塩小学校長 下重 祐三

「赴任地は喜多方市立熱塩小学校です。」

この言葉を前勤務先の校長先生に伝えられ、最初に頭に浮かんだのは「蔵とラーメンの街 喜多方」でした。

自分の生まれは東白川郡塙町で実家が食堂を経営していたため、子供の頃からラーメンを食べて育ちました。そのため、ラーメン大好きな子供になりました。白河高校生時代も、白河のラーメンを友達とたくさん食べました。その時代は、特に白河ラーメンなどと世間から認められてはおらず、普通のラーメン屋が多い市でした。

そんなラーメン大好きな自分が、平成9年に新採用で金山町に赴任した折、知り合いが喜多方に住んでいたため、初めて喜多方ラーメンを勧められ食べました。「これが日本三大ラーメンの一つのラーメンか」と、感動しながら食べたことを記憶しています。また、その頃は馬車も動いていて、何と趣のある素晴らしい街なんだろうと感じました。

それから約30年、ラーメン屋さんは相変わらず賑わいをみせ、全国から人が訪れ、朝から大行列ができるほど有名になっていました。「喜多方にはラーメンしかないんだよ」という話を耳にすることがあります。しかし、自分には「喜多方の子供達には、全国に誇れるものがある。何と素晴らしいことだろう」と思うのです。

身近にあるもののよさはあまり感じないものです。しかし周囲からしてみれば本当に素晴らしく、誇りに思えることがたくさんあります。

本校のある熱塩加納町でも、地域の方が有機栽培で作った野菜などを給食で食べることができます。これも全国に誇れる素晴らしいことです。

「ふるさとのよさを誇りに思う子供を育てたい、育てよう」という思いを、校長になってより強く思う今日この頃です。